

中国語中国関係学科1年次夏期語学研修報告

—教育的効果と研修の運営に関する考察—

澁谷 鎮明、黄 強、和田 知久

1 はじめに

国際関係学部3つめの学科として今年設置された中国語中国関係学科では、1年次に全員参加の中国への夏期語学研修があり、本年度の夏に初めて実施した。研修は8月6日から4週間の日程で、本学の協定姉妹校である外交学院（中国・北京市）にて行われ、9月2日に参加者全員が無事に帰国した。

この語学研修は、本学科の教育の重要な柱の一つである中国語教育に関し、①早い時期に正確な発音・声調に接し、これを身につけることで「使える」中国語の基礎を作り上げること、②この基礎をもとに2年次以降に中国語検定、HSKなど中国語資格取得などを目指す契機とすること、また③明確な目標を1年次に作ることで、学生のモチベーションを高めることなどの目標をもっている。

さらには、早い時期に現地である期間日常生活を送ることで、中国の（あるいは北京の）生活感覚を体得して中国という地域に慣れるとともに、日々自分の目でとらえた中国の日常の姿を通じて、学生のもつ中国イメージを広げ、本学科のもう一つの柱である「中国研究」に入る準備をさせるという意図も持っている。

しかしこの研修は今回が初めてであるため、これまで準備は行ってきたものの、このような教育上の効果が十分に得られるかについては、研修の実施時に詳細に調査し、検証を行う必要がある。

また同様に、運営上どのような問題が生じるかについても、準備・調整を行ってきたとはいえ、この種の海外研修には、「始まってみないとわからない」不明な部分がある。特に運営上の不具合については、今回できる限り把握し、受入先の外交学院担当者とも調整を図ってゆく必要がある。

そこで本報告では、実践報告として夏期語学研修の概要を述べた上で、来年度以降の研修と、今後の学科専門教育に資するため、教育効果、研修の運営について考察を加えてゆきたい。

なお、今回の研修を詳細に調査するために、黄、和田の2名の引率教員に加えて、澁谷が調査のために中部大学特別研究費Cの支援を受け、8月11日から8月25日までの15日間にわたって研修に同行し、その間に行われた中国語の授業（初級クラス）と学外研修にす

べて参加し、参与観察を行った。さらに滞在中・帰国後に一部の学生へのインタビューを行った。

2 2009年度夏期語学研修の概要

2.1 事前準備

2009年度の中国語中国関係学科1年次夏期語学研修は、8月6日（木）～9月2日（水）の4週間、本学の協定姉妹校である北京の外交学院にて実施された。

受入先の外交学院は外交官養成を目的とした、中国外交部所属の大学である。2003年より本学と学術交流協定を結び、本学は交換留学生を受け入れるとともに、中国語短期研修プログラムを実施している。また外交学院のキャンパスは北京市の中心部に近い西城区にあり、北京の各地域へのアクセスに便利な場所に位置している。

本学科では、この研修を1年次の学習の重要な行事の一つと考えているため、基礎演習Aの時間を数回利用して研修の準備作業を実施した。まず5月19日には第1回説明会を実施してその概要と受入先の外交学院に関する情報を伝え、ビザ用の書類などの配布を行った。次いで7月14日には「生活に必要な中国語」の学習と現地生活に関する説明を行い、7月21日には出発前最後となる第2回説明会を行って、各種手続きと中国、あるいは北京に関する情報を伝達した。さらには7月28日に国際交流センターに依頼し、危機管理セミナーを実施した。これにより学生に研修内容、研修中の注意事項を周知するとともに、研修中の自己管理意識の重要性を喚起した。

一方で7月11日（土）には保護者説明会を開催し、学科主任と引率教員より上記の事項について保護者にも説明し、理解と協力を求めた。

2.2 研修の概要

本学科の研修は、この外交学院の外事弁公室留学生弁公室所属の漢語教室専任教員が担当する中国語の授業と、中国人学生との交流会、校外学習（中国語実践）などの活動から構成される。

表1は今回の研修の日程表で、これを見ると今回の研修のおおよその骨格が理解される。北京に8月6日に到着し、9月2日に帰国するまで、数回の野外活動



写真1 北京外交学院

を除いて、ずっと北京に滞在して研修を行った。

平日は基本的に午前8時から12時までの4時間にわたり中国語の授業が行われ、午後は木曜日を除き、「自習ゼミ」か、中国人学生との交流会、および学生による発表を主とする「活動報告会」が行われる。週末は毎土曜日に「中国語実践」として学外活動が行われ、日曜日は自由行動となっている。なお8月8日(土)については、到着後間もないため、必需品の購入や周辺の施設の紹介など、約1カ月にわたる研修生活の準備時間とした。

2.3 中国語学習

中国語の授業は、今回の研修の軸であり、すべて外交学院専任の中国人教員に担当いただいた。なお担当の専任教員は学部所属ではなく、外事弁公室の中にある対外漢語教研室所属で、通常は全学的に留学生や外交官研修生の中国語教育を担当している。表2は研修中の中国語の授業の時間割である。これを見ると、授業は「読解作文(読写)」4コマ、「会話(口語)」4コマ、「リスニング(聴力)」2コマからなり、各科目は休憩時間10分をはさんで約2時間行われる。

なお中国語のクラスは学生の能力に合わせ、入学時に初心者かあるいは初心者に近かった者が属する「A班(初級クラス)」と、入学以前に中国語をある程度使いこなしていた学生の属する「B班(中級クラス)」の2クラスを編成した。以下は筆者のうち澁谷が参加した初級クラスの授業内容を中心としてその内容を述べる。特に初級クラスについては、学生にとって春学期の復習にもなるよう、やや基礎的な文法からスタートするよう外交学院側に要請した。

中国語の授業のうち「読解作文(読写)」は、中国語の総合的な力を作るための授業であり、テキストは『対外漢語本科系列教材 漢語課程 第一冊上』(北京語言大学出版社)を使用して行われた。基本的な授業内容は、授業の最初に前回の復習テストを実施し、

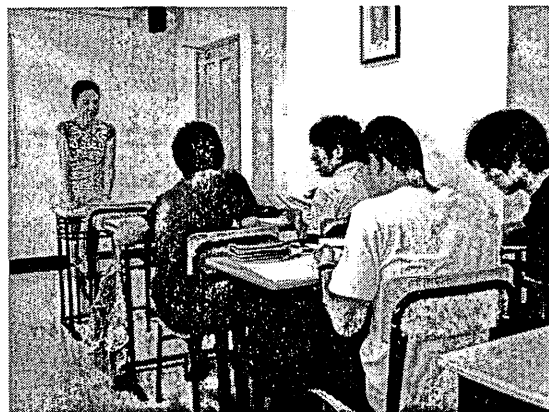


写真2 中国語(会話)の授業

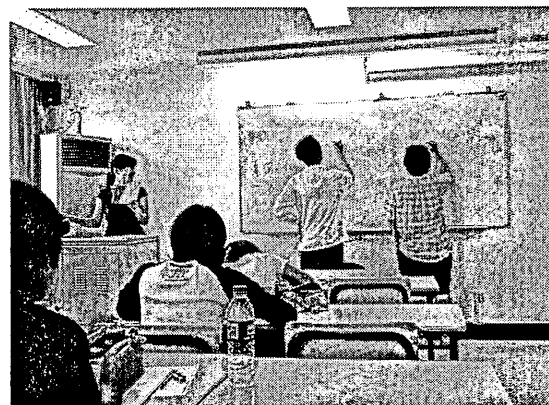


写真3 中国語(リスニング)の授業
(指名された学生が書き取りを行っている)

その際に学生を選んで黒板に解答を書かせ、答え合わせと解説を行う。そののち、教科書に沿って例文の発音と文法について解説するという方式であった。

また必要に応じて教科書の例文から離れ、生活に必要な表現、たとえば両替や買い物の際の表現については、何度も繰り返して練習を行っていた。授業の最後には、ほぼ毎回宿題が出されるとともに、予習箇所についての指示がなされた。またこの授業では実践を重んじており、場合によっては「この表現を使って日用品の買い物をし、買ったものを次回の授業に持ってきて説明するように」などの宿題も出されていた。

次に「会話(口語)」は、『中国語口語速成 漢語口語速成日文注釈 入門編上』(北京語言大学出版社)をテキストとした。この科目は会話の授業であるため、発音には必須であるピンイン(中国語のローマ字表記)を重視していた。授業内容は、最初に前回の授業で出た単語や短文の聞き取りの小テストが行われるが、その際に漢字とともにピンインを書かせていた。この後にテキストに沿って授業が進められるが、そこで登場する語彙を用いて、教員が何度も何度も学生に質問を繰り返し、それに答えさせていた(写真2)。そのため学生はいつ自分の番が回ってくるか緊張しながら必

死で教員の中国語を聞きとろうと努力する姿が見られた。

また上記のように会話の授業であるため、正確な発音のチェックが必要であるためか、テキストを利用し、ピンインで表記される音自体の練習も繰り返していた。

「リスニング（聴力）」の授業は、『漢語听力教程 初級A種本 上』（北京語言大学出版社）をテキストとして採用しており、テープを使った聞き取りが中心であった。授業内容は、他の授業と同じく前回の授業の内容を用いた復習テストを行い、読解作文の授業と同じく、学生をアトラダムに選んで全員の前で黒板に解答を書かせていた（写真3）。その後、テープを使ってテキストの聞き取り問題を行っていくという方式であった。

これらの授業はすべての科目で宿題が出されるとともに予習箇所が指示されており、これを参加学生に確実にこなしてもらうため、月曜から水曜の14:00から1時間半程度「自習ゼミ」時間を設定した。この時間に学生は講義室に集合し、各自宿題と予習を行うこととした。教室には引率教員（中国語担当者）を配置し、学生の質問などに対応した。

帰国前日の9月1日（火）には各授業の修了試験が行われ、全員合格し修了証を授与された。

2.4 各種活動

研修では、中国語の授業以外に、校外学習、中国人学生との交流会、および活動報告会が行われた。

校外学習は、学んだ中国語を実践の場で活かすことをその目的としており、8月15日、22日、29日の土曜日に実施された。基本的には学外での見学を中国語中心の説明で行い、実際の中国語のスピードにふれるというスタンスに立っている。ただしあまりにスピードが速い場合などには、引率教員が通訳を行った。またこれと同時に、これらの見学は本学科のいま一つの目的である「中国の理解」にも役立つものである。

8月15日には万里長城に赴き、中国語を中心とした案内をうけ、見学した。8月22日はオリンピック施設建設を含む北京市の都市史と都市計画について展示する「北京城市企画館」と、中国の著名な作家老舎の脚本「茶館」をモチーフにした「老舎茶館」を訪問した。

さらに8月29日には、「社区」（地域コミュニティ）見学として、北京郊外の「模範」農村を訪問した。写真4は農村での説明を受ける様子である。この際は引率教員の黄・和田が一部通訳を行っている。

交流会は、日本語を専攻する外交学院の学生と行ったもので、到着後すぐの8月7日（金）には、外交学院側学生から映像を交えた大学の紹介が行われ、中部

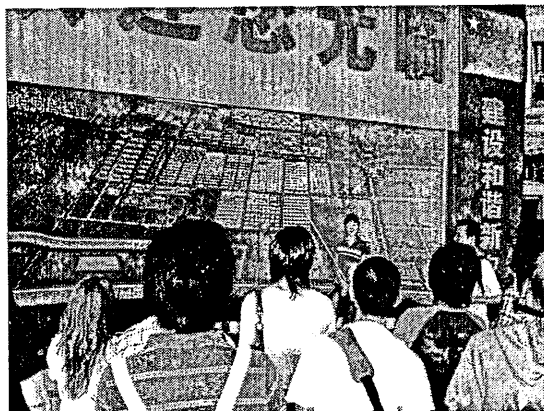


写真4 農村社区見学（北京郊外・韓村河）



写真5 中国人学生との交流会

大側ではリーダー学生がお礼のスピーチを中国語で行った。帰国直前の9月1日（火）にも交流会が行われ、親睦のためのゲームが行われた（写真5）。

「活動報告会」は参加学生の報告会で、8月21日（金）にはこの時点までの自己評価を発表した。8月28日（金）には、各自が撮影した北京の写真を持ち寄り、これを使って報告を行った。これは不正確な情報や報道を鵜呑みにするのではなく、中国社会を現地で観察する姿勢と、それを中国という地域を理解するための糸口としようとするものである。

3 教育効果に関する考察

3.1 中国語教育に関する側面

本学科では前述のように、今回の研修を通じ、学科教育の二つの目標である「中国語学習」と「中国研究」の進展を図ることを主たる方針としている。この二点について、今回の研修での学生の反応や参与観察調査結果などをもとに、研修の持つ教育効果や教育上の課題について考察したい。

中国語教育に関しては、第一にこの機会に正確な現地の発音を耳にすることが一つの大きな目標であるだろう。基本的に北京の発音は日本人が習う「中国語」の発音であり、北京で語学研修を行う意味は大きいと

考えられる。また学生は4週間生活をするため、さまざまな生活上の場面で中国語を使う機会もあり、実践的な語学学習になるものと考えられる。

今回外交学院の中国語教員には、「中国語で中国語を教える」ことを依頼した。外交学院の中国語教員からは、英語を使って中国語を教えることも可能であるとの提案も得ていたが、打ち合わせの過程で、研修に参加する学生の一部の英語能力には残念ながら問題があると考えられ、かえって2つの外国語の間で混乱すると予想されたため、学科側の判断で英語は使用しないこととした。

ただこのような「中国語で中国語を教える」方法は多くの言語教育において行われ、「ダイレクト・メソッド」などと呼ばれる。今回この方法で中国語を教授してもらったため、初級クラスの学生は当初教員の中国語の指示が十分に理解できなかったが、時間が経つにつれ次第に理解できるようになった。前述の8月21日の活動報告会において、初級クラスの学生の一人が「はじめは先生の中国語の指示がわからなかったが、今では理解できるようになった」と述べており、中国語の授業が始まって2週目にはすでに理解できるようになったものと思われる。

これは日本語を飛ばして中国語の意味が理解でき始めていることを示していると思われ、語学学習には重要であると思われる。このような現象は英語を含めた多くの語学学習において見ることでできることであるだろう。これを受けて、本学科では1年秋学期の授業から、授業の指示（「教科書何頁を開きなさい」「私の後について発音しなさい」など）を中国語で行っている。これは学科の中国語教育に良い影響があらわれたといえるのではないだろうか。

反面、このようなダイレクト・メソッドは、あまり複雑な指示ができないという限界も抱えているように見受けられ、初級クラスでははじめのうち学生側に指示が十分に伝わらないというような場面も見られた。しかしながら外交学院の中国語教員は、指示が分からない場合、何度もゆっくり繰り返し述べたり、黒板に書いたりするなど、改善の策を準備していた。

特に日本人学生の場合、たいていの場合、漢字を書けばほぼ指示が理解されるため、この方法を用いやすいものと思われる。日本人の中国語学習の場合、英語よりも、ある種共通の意思伝達手段である漢字を用いるべきであるかもしれない。

外交学院の中国語教員の授業内容（初級クラス）は、上述のようにこれまでの経験に裏打ちされ、実践的かつ効果的であったと評価される。特に、初級クラスにおいては、会話、読写、聴力の3つの教授内容のレベルが同じであり、同じ単語や表現があらわれるため、

中国語初級レベルの学生には、3つの授業で基礎的な単語と表現を反復練習することとなり、頭に残りやすかったようである。また繰り返し教授された単語と表現の多くは、「両替のしかた」、「買い物」、「バスの乗り方」など、現地生活に密着した内容であり、長期滞在に必要な実践的会話を含む内容であった。外交学院の中国語教員によれば、これらの内容をやや意図的に繰り返して教えているとのことであった。

なお中級クラスにおいても、コンピュータを用いて、中国語でパワーポイントを用いたプレゼンテーションを作らせたり、ディベートを中国語で行わせたりするなど、工夫された項目が多かった。

研修における中国語授業の問題点としては、授業内容よりは、クラス分けやクラス内の能力格差の問題があったように思われる。まずクラス分けの際に、能力的に初級・中級クラスの間中に位置する学生がおり、はじめは中級クラスに配置したものの、ついていけずに初級クラスに変更した。しかし初級クラスは初心者に近い内容であるため、今度は簡単に感じてしまうという状況が生じた。

これは中国語既習者全体のレベルがさまざまで、中級クラスのレベル設定が難しかったことに起因する。この点は、中級クラスのレベル設定など、来年度外交学院側と調整をしなければならない点であるだろう。

また中国語を習い始めて半年の初級クラスの中にもレベル差が生じていた。授業を担当した外交学院の中国語教員も、これに気づき、「レベルの高い学生が退屈していないか」という懸念を持った。これは学生の意欲のあるなしによって、春学期の授業で差がついてしまっていることが考えられる。これについては、今後必ず生じる問題であると考えられ、学生のレベル把握と個別のフォローなどの対応が必要となるだろう。

ところで今回の研修においては、上述のように、午前中の講義時間の後、自習時間を設定したが、このことも良い影響を及ぼしたように思われる。語学の授業において予習・復習は当然のことではあるが、学生の中には高校までに予習復習の習慣を十分に身につけていない者もいたようである。「予習をすると授業時間中に苦しまなくなる」、あるいは「予習復習で語学が確実に身に付く」など、当たり前であるが重要なことが、そのような習慣をもたない学生に理解されたものと考えられる。

3.2 中国理解・中国研究に関する側面

本研修は、基本的には語学の研修であるのだが、1年生という早い時期に、中国で1か月間滞在することは、中国理解・中国研究という側面でも得難い体験である。生活することそれ自体が、現地の物価感覚や生

活リズム、あるいは中国の抱える問題を体験することにつながる。

今回の研修においては、このような側面も重視し、外交学院の中国人学生との交流会を設定するとともに、活動報告会を設定し、写真撮影などを用いた「中国ウォッチング」の成果を発表させるなどのプログラムも準備した。

筆者らが滞在中に学生に何度かインタビューを行ったところ、「予想以上に中国（北京）が発展している」と感じ、「貧富の格差をさまざまな側面で目撃した」ことや「物価の安さと場所（店の種類など）による価格差」「日本企業や日本製品の進出の多さ」などについて驚きを持って認識していた。これは同時に日本社会と比較することで、日本という国や社会の相対化が始まっていることにもなるだろう。

活動報告会では、記念写真のような写真を出した学生もいたが、「中国人のマナー」「食文化」「人口の都市集中」「都市整備」など、今後の研究テーマにつながるような発表を行った学生も多かった。これが中国という地域に関する問題意識の入り口になることが期待される。なおこの報告会の内容は、帰国後、秋学期の基礎演習Bにおいて、学生の文章を主体として作成する「研修報告書」にも盛り込まれることとなっている。

一方で、研修中に得た体験を、中国理解や問題意識に結び付けるために、帰国後、秋学期の演習科目である基礎演習Bにおいて「夏期語学研修から帰国したみなさんに“考えて、調べてみてほしいこと”」と題する宿題を課した。これは、学生が目にしたものが、実は中国を理解するためのキーワードに直結するものであることを示し、注意を喚起するものである。

たとえば、次のような質問をし、調べてそれに回答するように指示した。

「みなさんが過ごした外交学院の敷地には、なぜか団地のような建物が建っていて、おじいさんやおばあさんなど、一見大学とは関係ない人がたくさん住んでいたのに気がつきませんか？①これは何故でしょうか？②またこの人たちはどういう人たちなのでしょう？」

これは、かつて中国社会の重要なポイントであった、「単位制度」の名残が現在もあることを示すために、行った質問である。また単位制度については1年春学期の「中国研究入門A」でも触れる内容であり、この質問は、学生に目で見たものと講義で学習したものがつながることを示す意図もある。

このような「宿題」をはじめとした基礎演習Bとの組み合わせで、学生の中国イメージの拡大をはかりつ

つ、現地で観察し、それを自分の持つ知識や情報と照らし合わせることの重要性について理解させようと考えている。

このように、滞在自体が学生の中国理解や中国研究に役立つものであると考えられ、本学科では上記の「宿題」など、さまざまな「仕掛け」を利用して、この滞在中で学生が得た経験を深めていくべきであると考えている。

4 研修の運営面に関する考察

4.1 準備と学生の意識の問題

次に、本研修の運営面について考察を加えておきたい。今回初めて行う研修であったため、筆者らを含む学科スタッフや学部事務室は、研修の運営に向けての準備は試行錯誤の連続であった。その際、これまで数年間国際交流センターで行ってきた外交学院への短期研修で得た情報は大変役立った。

また外交学院の担当者も、ここ数年間本学の国際交流センター主管の4週間の研修を受け入れた経験があり、本学の研修や学生の情報をもった上で、かなり積極的に対応していただいたことも、無事に研修を終えられた大きな要因であった。

ただしやはり初めての研修の運営であったため、研修中いくつかの問題点が浮上するとともに、今後より強化し、活かしていくべき点も認識された。

まず挙げられるものは、参加学生の自己管理（体調管理）の問題である。今年入学した1年生は、一期生であることもあり目的意識が高く、基本的には大きな問題はなかったのだが、それでも引率の教員への負担はやや大きかったように感じられる。

これは、現地到着後の早い時期に腹痛などで体調を崩す学生が立て続けに数名出たため、今後配慮する点であるだろう。出発前の準備会において、くれぐれも体調を崩さないように注意をしたが、まだ学生の自覚が足りない部分もあったように思われる。ただしこれは、筆者らが見る限り、海外が初めての学生がおり、そのような学生がはじめて訪れた中国で、自らの体調を顧みず「日本と同じペース」で「日本と同じ行動」をしようとした面がある。

逆に、自分で中国の料理が合わないという早い時期に判断した数名の学生たちは、近くの日本系スーパーマーケットで食材を調達し、宿舎内のキッチンで毎日日本食を作っていたようであり、自己管理の側面ではかなりの個人差も見られた。この学生たちのような、自己管理（特に体調管理）ができる学生が多い場合、かなり引率教員の負担は少なくなるだろう。来年度以降、準備段階からこのような点を意識しておくべきであるだろう。

さらに出発前のオリエンテーションにおいて、外交学院について説明をし、本学と外交学院の姉妹提携関係についても講義したものの、具体的なイメージを持てず、この点を十分に理解できていない学生も見られた。このような交流・協力関係が十分に理解できていない場合、今後「金を払っているのに、自分はサービスをうける客である」というような誤った認識が生じる余地がある。今後この点についてより詳細に参加学生に伝えるなどの対策が必要と思われる。

4.2 授業と学外研修などの運営

今回の研修においては、教室で行う授業に関しては、事前に対外漢語教研室担当者に、学生の中国語レベルや春学期の学習内容をかなり細かく伝えることができたため、運営に関しては大きな問題が生じなかった。今後とも対外漢語教研室との連絡を密にしてゆく必要がある。

学外研修においては、今年に関しては問題とならなかったものの、今後留意すべき点があるものと思われる。学外の研修については、外交学院からバスと運転手が準備されるのみである。これは通常外交学院が、他の中国人学生や外国人留学生在が見学するときと同じであり、いたって「当たり前」の対応である。しかし、ガイドのついた観光旅行のように懇切丁寧に説明をするわけではなく、引率教員と学生で、自力で見学することとなり、一部の学生は「ほっぽらかされた」感じを持ったかもしれない。

本年度に関しては、上述のように学生の意識が高かったため、各自で見学することに問題はなかったが、今回利用した旅行会社からは「学生から不満が出ないよう、旅行会社の現地ツアーを利用しては」とのアドバイスがあった。万が一、今後参加する学生が本年度よりも海外経験がない学生ばかりであったり、精神的に弱い学生が増えたりした場合、今後学生の状況を見て判断する必要がある。ただ、基本的には「研修」であるので、見学程度は学生が自力で行えるようにしたいとも考える。

また中国人学生との交流会であるが、8月7日に行われた第1回のものについては、初めてのことであり、交流を行う主体である双方の学生間で、「交流会」のイメージが異なっていた。こちらはフリートークのようなものを考えていたが、外交学院側はやや公式の「学校紹介」を行った。「人間の交流」なのか「学校の交流」なのかという点について事前の連絡がやや不足していたため、本学側の学生はだいぶ当惑したようである。今後このようなやや細かい点についてもフォローすることが必要であるだろう。なお、第2回目の交流会は、スムーズに行われた。

4.3 宿舎などの施設利用

研修で利用した宿舎は、留学生などの外国人学生や客員教授のための「国際交流中心」であった。この宿舎では学生は基本的に2名で1部屋となっている。今回の研修においても、学生は男女に分かれた上で、基本的に2名1部屋とした。また引率教員も全員宿舎に滞在した。

この宿舎は外国人用に新たに作られた建物であり、他の学生寮と比べてエアコン・シャワー・ネット環境が完備されており、格段に設備がよく、今回参加した学生も「日本と同じ」ではないにせよ、かなり快適な生活を送ることができたと思われる。さらに中国語の授業は宿舎の最上階(11階)にある、外国人学生用の語学教室を使用したため、宿舎内に教室がある状態となり、「遅刻をしたくてもできない」非常に恵まれた環境であった。また、長期滞在教員用の部屋もあったため、引率教員は学生と同じ宿舎に滞在でき、学生の状況を把握するのにきわめて好都合であった。今後ともできるかぎりこの宿舎を利用したいと考えている。

なお、研修先が外交学院であることについては、いくつかわめて好都合な点があったものとする。上述のように、まず外交学院がこれまで本学の国際交流センターの短期研修を受け入れた実績があったことは、危機管理を含む連絡体制と信頼関係がすでにできあがっているという点で研修の準備がきわめて容易であった。

また初めて海外に出る学生も含まれているため、地方都市ではなく、大都会である北京に行くことは、「カルチャーショック」を和らげる効果があったものと思われる。帰国後、一部の学生が述べた「日本と大差のない生活環境であった」という意見がこれを象徴している。さらに北京の中でも外交学院の立地場所が非常に良かったという点も評価できる。学生が良く利用した日本系デパートも徒歩15分程度の場所にあり、市内中心部にも近く、緊急の場合にも日中友好病院をはじめとして、外国人が利用できる施設が多い。

今後、学科独自の研修先を探す必要もあるかもしれないが、現在のところ運営面から見る限りにおいては、外交学院は非常に高い評価ができる研修先であると考えられる。また今後新しい研修先を探す際にも、北京や上海などの大都市で信頼できる研修先を探す必要があるだろう。

5 まとめ—今後に向けて—

最後に、来年度の研修をどのように行っていくべきか、今回研修を行った1年生について、どのように今回の研修の成果を活かして行くかという2点を中心に述べ、まとめに代えたい。

今回の研修は、正直なところ前述のように、予想よ

りも運営にかかる引率教員の負担は大きかったように思う。しかしながらそれに見合う教育効果などのメリットがあったように思う。特に中国語教育については、多くの学生の能力がさまざまな面で伸ばされたものと思われる。特に「中国語で中国語を習う」ことに慣れたことや、春学期にやや学習が遅れていた学生がフォローアップできた点などは大きな収穫であった。同時に、研修での学生の中国滞在経験は、近年の氾濫する中国情報を取捨選択するための基盤となってゆくものと思われる。

来年度以降、今回の研修で得た学生の自己管理や研修の意義、生活上の注意事項をオリエンテーションで的確に伝え、日程を微調整するなど、事前準備や計画をいま少し修正・洗練するとともに、引率教員の負担を考えたシフトを考えたい。今後も1年生夏に研修を行ってゆければと考えている。

ただし、今年の一期生はかなり目的意識の高い学生がおり、この能力の高さで乗り切った部分もあるように思う。来年度以降、学生の状況把握をより早く行う必要があるかも知れない。なお、今年度の1年生は、本来きわめて団結力が強いが、研修で1ヶ月間生活をともにしたことで、さらに学生相互のコミュニケーションが強まったものと思われ、今後の学科行事などに

もよい影響をもたらすように思われる。

一方、研修を終えた学生に対しては、研修の成果を最大限生かすことができるようなシステムを整備しつつある。研修を本学科の1年次の教育の重要な行事と考え、基礎演習を研修とリンクさせて利用することは既定の方針であったが、研修終了後の基礎演習Bでも、前述のように特に北京滞在の経験を学生の中国理解に結びつけるような形で、研修の報告会を10月末に実施予定であり、11月中に報告書をまとめる方針である。

また中国語の学習に関しても、上述のように帰国後の秋学期の授業において、外交学院で使用した教科書を手に入して中国語の専任教員間で検討し、研修で学んだものが十分に活かせるようにするなど、今後教育システムを整備してゆきたい。

謝辞

研修期間中、著者の一人である澁谷が、のべ10日間にわたって授業に参加することを快諾していただいた外交学院対外漢語教研室の3名の先生に、記して感謝申し上げたい。

また本報告は、平成21年度中部大学特別研究費CP「中国語中国関係学科における教育システムに関する検討」の一部を使用した。

教授	国際関係学部	中国語中国関係学科	澁谷鎮明
教授	国際関係学部	中国語中国関係学科	黄 強
講師	国際関係学部	中国語中国関係学科	和田知久

表 1 中国語中国関係学科1年次夏期語学研修日程

	月 日		都市名	午 前	午 後	夜
1	2009 年 8 月 6 日	木	名古屋 発 北 京 着	7:20 中部国際空港 3 階国際線出発ロビー集合 9:20 中国国際航空【CA160】便にて北京へ【所要:約 3 時間 35 分】 11:55 北京首都空港到着後、両替。 (時差:日本時間-1 時間) 専用バスにて外交学院学生宿舎へ。入寮手続き。		
2	7 日	金	北京 滞在	クラス分け (50 分×4 コマ)	中国学生との交流会	
3	8 日	土	〃	終日:生活準備		
4	9 日	日	〃	終日:自由行動		
5	10 日	月	〃	8:00-12:00 中国語授業 (50 分×4 コマ)	自習ゼミ	
6	11 日	火	〃		自習ゼミ	
7	12 日	水	〃		自習ゼミ	
8	13 日	木	〃			
9	14 日	金	〃		中国学生との交流会	
10	15 日	土	〃	中国語実践 (校外学習 300 分) 万里の長城 (八達嶺)		
11	16 日	日	〃	終日:自由行動		
12	17 日	月	〃	8:00-12:00 中国語授業 (50 分×4 コマ)	自習ゼミ	
13	18 日	火	〃		自習ゼミ	
14	19 日	水	〃		自習ゼミ	
15	20 日	木	〃			
16	21 日	金	〃		14:00-16:00 活動報告会	
17	22 日	土	〃	中国語実践 (校外学習 300 分) 午前:北京城市企劃館 午後:老舎茶館		
18	23 日	日	〃	終日:自由行動		
19	24 日	月	〃	8:00-12:00 中国語授業 (50 分×4 コマ)	自習ゼミ	
20	25 日	火			自習ゼミ	
21	26 日	水			自習ゼミ	
22	27 日	木				
23	28 日	金	〃		14:00-16:00 活動報告会	
24	29 日	土	〃	中国語実践 (校外学習 300 分) 中国人社区訪問		
25	30 日	日	〃	終日:自由行動		
26	31 日	月	〃	中国語授業 (50 分×4 コマ)		
27	9 月 1 日	火	〃	修了試験 (50 分×4 コマ)	中国学生との交流会	
28	2 日	水	北 京 発 名古屋 着	14:45 までに北京首都国際空港到着 16:55 中国国際航空【CA159】便にて帰国の途へ【所要:約 3 時間 5 分】 21:00 中部国際空港到着後、解散 (時差:現地時間+1 時間)		

表 2 中国語授業時間割 (初級クラスの例)

	1 時限目 (8:00-9:50)	担当者	2 時限目 (10:00-11:50)	担当者
月	読写 (読解作文)	郭鳳英	聴力 (ヒアリング)	梁春燕
火	口語 (会話)	姜倩	読写 (読解作文)	郭鳳英
水	口語 (会話)	姜倩	読写 (読解作文)	郭鳳英
木	口語 (会話)	姜倩	聴力 (ヒアリング)	梁春燕
金	口語 (会話)	姜倩	読写 (読解作文)	郭鳳英
土	中国語実践 (万里長城、北京市規画館、社区見学)			